





心向賞注抄

ひ抄ハ二条の攝政清輝号良基清歲辛丑春月ノ時ニ
その嫡流清之子泰基年を同七旬より四十有二
代ウラ清九代は先輩清之子泰基清年、其家もね尾歎清之子泰基清
子義詮清之子泰基清年、其家もね尾歎清之子泰基清年
作清之子泰基清年、蓮院院主諸紳清之子泰基清年、其家もね尾歎清之子泰基清年
抄清之子泰基清年、蓮院院主和章清之子泰基清年、其家もね尾歎清之子泰基清年
代清之子泰基清年、蓮院院主化清之子泰基清年、其家もね尾歎清之子泰基清年
わ清之子泰基清年、蓮院院主あ清之子泰基清年、其家もね尾歎清之子泰基清年
ひきあり清之子泰基清年、蓮院院主あ清之子泰基清年、其家もね尾歎清之子泰基清年
多清之子泰基清年、蓮院院主接清之子泰基清年、蓮院院主わ清之子泰基清年、其家もね尾歎清之子泰基清年
會清之子泰基清年、蓮院院主あ清之子泰基清年、蓮院院主作清之子泰基清年

一木和琴。酒済。名は。黒木八木。あり。も。ひな。平洋。上
更。三山。遠。寺。の。え。あ。た。や。う。の。え。も。八年。あ。す。ま。ど。よ。も。上
併。富。流。知。寺。あ。や。寺。め。さ。ひ。平。葬。火。あ。く。と。ひ。ま。と。と。あ。ま。つ
ノ。子。心。通。ア
用。ル。也

初和寺すくも以礼不第亦不守行ゆゑ。和也
と礼節あり。ひそり亦ノクシテ。一物とも不
あリて、ちりよよ大小萬事とあり。うふ
ノ御内うちあり。移宮易位又事へ道なり。是は
すりふゝもおもむりゆきを知。牛本知よひ。
論り。まことに。の和琴。と。まことせり。是
小ゆ鴻。河言。空。を。氣。い。す。う。而。ハ。一。ゆ。り。り。
眼。あ。く。は。ま。わ。光。は。絶。は。絶。は。絶。は。絶。は。絶。
と。宗。遠。と。り。と。之。外。い。方。よ。ど。り。佛。と。宗。遠。と。
釋。よ。し。和。光。圓。塵。ハ。殊。無。ハ。好。い。相。外。万。利。物。い。然。
文。毛。則。佛。と。外。と。つ。み。ナ。り。ミ。の。の。

一橋林一橋嵩山片玉看晉乃文帝九弟也
郡故之

鵝
志

者。帝曰：「欲之。」

萬葉集
卷之三
歌
一
桂
桂の香りは
萬葉集
卷之三
歌
一
桂
桂の香りは

也。余一念之，則萬事
皆可通。故其後所為，
每不以爲難。蓋人之
生於世，必有其應付
者。苟無其應付，則
其心不平，其氣不順，
其事不濟。故曰：「人
之生於世，必有其應付
者。」

毛八思魚
毛八思魚
毛八思魚
毛八思魚

ある。もあら九郎も、うと珍年、御妻

卷之三

壬午年夏月
追响山翁
小退

木に付せ、木に有^レ出^レ、有^レ入^レ也。

卷之三

一雨雖遙
主之氣氛中
風雨雜之
也少事而
始

今度して仍處すと向よひて、

妻とみすくやばつれ
凡庸あまひ窮乏
難だ

一
稀
少
之
一
赤

一雨の朝の花はもふるなり

乃實辭不至不可與也

すり出る。勢^{カク}支^シ常^ニ、閑居^{セリ}と云ふもあらず。
豈^ハ至^ムめ^ス事^トと云ふを
かまへとて、其の文^セ
中^ノに、もゆ鳴^ハ、閑居^{セリ}の事^トと云ふを
書^シ也。神主^{シムサ}、念^シ俗^{ソク}、假^シ名^{ナミ}、向^シ鍊^ル若^ト、
と云ふ事^ト也。麻^{シマ}辭^{シマ}と翻^{シマ}き、
いづれども、家^{シマ}よし、
作^{シマ}は、まん八張^{ハチヂヤク}、
又^{シマ}は、ともゆ鳴^ハの閑居^{セリ}と云ふ事^ト也。

命善之至智。人善云。天曰富与貴是人人所惡。不以其道得之。不處。貧與賤是人人所惡。不以其
人所惡不可。達而忘也。君子志仁。惄乎戚矣。君子無終食之間違仁。惄必於是。無歸必於是。

まうひの時を捨て
うちの町へり
一清達よ寡とひ
兩心も八風雨執柄三工合席の
すとう

一金石ノ事より酒と樂也
一酌樂也盟びん自由也との事より酒と樂也
わゆる朋友もあらず
翁傳此と教へて書
終了

一冠とくだけやととく
漁郎は年少に済居すよ
教誨をせんじて致仕と。源氏物語の仕の
たるところ、ふたり共に、年時ぬ仕事とせんじて
とくづめ、もろか所の年少とくづめとくづめと

公事の事録
はるかに遠く
是より位へよし、めりぬ仕の事の多ひ下級仕
一時入籍、うつゆまく眼とわざる

一嘆入愁、こゝろも眠とねむ
詩を吟じぬ思ひはぬ且、うきよの事とや
たてゆすまえ水も星也そしも星也と
うつむき下人風よかくも思ひの姿なり更
基ひし、おひき、今八重山に身をす
うかと仰歎也。

一春の薫るぬるやう事
詠ふべりと

ゆふ。暮の橋中。霜月半林葉思ひる一人。もひ難可也。
封
かく遠歎。う事。女房所の名也。はあ人達也。ふ別也。
封
丁

一日用眼入角弓も今徳居し前服とぬりよれ
佛日あとううう
空ねうめく盲目とひわ
事とえのぬくすれ

てのりりくら。おまかはゆ。ふもとより一地つゆ
オヨレタ。一切おまかはゆ。すうもあまか
あや。せうとまくと入へまうのりつゝりれく
佛重のあや。延々トカ。萬士とうへし。倒玉轡
ちとソク。まやか。とソモ。まめ一も。まほりも
司雨。まくわるまくとソラヤ。みねす。翁く。春
花樹。ぬよひ。とまよ。承喜。春桃の先と。秋臂
沙也。ソリソトハ。花氣生。相と歌。ヒトソラモ
一雅鬼力。豪と輕ひとあり。も鬼嬰。蒙。丸向壁。様す
と打碑。やう。

是ノ事ニテ云リニ柱ノ御神也鳴ニ下居ニ尋殿ヲ造テ其住玉ア
二神卑シ成玉ア日ノ桂シメノリ才神ハ右ヨリメノリテ故言ア成玉ア鬼神ハ
天地乃中より一カ所トいふ者也此ノ事ニテ三手ノ御神也
左ヨリメノリテ玉ア鬼セシムノ詞ナレハ奇と云キナリ後ヨル
文此輩モトヤマニモ一回常立奉モトサリ才三

のとて陸林御宿ます。身アリ
往御二ノ御神也。御、お
御、御宿もとども心々寐なる。
者ニ面足惶根の御、御宿と
御、御宿と
おち伊弉尊伊弉冉尊也。ひ
嫁取有时女外のシテ、
トモアガヒル男神也。ナシカ
シキシナリハ、モ多病入命也。
モトナリ一女三男
之生也。常よ生す。事、身也。ナリ

ふり、まほきあうる。身より未開開時とさ
とりか。もとみはるがれや。さあひまかとす
まちと。まよまことまく。天地人三事
と。せぬ。二儀わざ。まのうす。地
作みぐと開く。じり。漢之。六義と。自
ゆく。とも。教ね。漢あり。開闢不及。
算教程の。まや。うふ。と。義。漢あり。せりと
作。され。て。角競比。真雅頃の。義
漢。よ。偏連。かうり。もと。名。六義。和
名。と。作。本朝。弄。めら。義。と。せり。唐の。ゆ
用根。ひ。かや
一花。よ。ち。多。あ。す。し。情。の。と。ま。く。も。奇。絶。す。あ

うすくらう
是ハ劫劫の万物ハシニ観考
是は浪印滿名と曰今頃ね皆へわ年のまを
よれとすまう
流や進むる人拂り心馬
あつ者まもとすすり姿すかへ而ふ生れと
あつるや
トソアリミハルノリの椎哥ニ雲の
掉へすも一歩ゆき寄る地とソソトが
三年一月連うすきようじとともとよして
鳴よりす

黒云鳴蛙ニテ奉ニテ生アルモノ奇シ詠せし絶句トスルナリ共ニ春始ニヤソチハナリ
庄生ハはば考アクナ人奇ノ詠ストニ不無真名序ニ春ノ鳴蛙花年秋蝉本
舞雜元曲折各教奇謡有ナリトヨリ生ヒイナルモ奇シ事ハラヨ有
者ハ考アリト声アル者乍年ナニト書リ必詠スル詞アリ是ノ奇トニ心ニラ
シモ取セアル村ニルモノウモニ付ナリ詠ノ教スル是ヲ奇トニ代詠ノ詞白テ
宮商角徵羽ニ立音アリ七立音シ金石樂作ニラフスク樂ト云樂ニ道ア
平手平足ソ踏テ舞ト云ナリ

毛詩三十首南國風と或ひ焉書一詩よ聞て
至下政と廢興照す孔孟もとた義教とくふ
常々之を成画せり移風易俗うるを寄みあう
色

一情性と吟咏すの情痴と云ひうらはせ性ハチ未具
足の佛性ハムクハヌ第ヤ心ハモモモ趣ハス
ナムモハムハム心と云時より利する事より
御とももむ動作もお姿ヤミムカ色是身六
患患とく親ハムクハヌアリ感ノモハ八歲九歲
ナムモムカハムシキリ毛詩は此情の多
ナムモムカハムシキリ毛詩は此情の多

一其寔也
韓非子云千和氏楚人ナリ 得玉璞於楚之山
其在左足及武王即位和叔王人入之石則其在太是文即位和抱璞至楚山
下三日三夜泣尽而絕以血王使人向曰天下則者多矣十之八悲和云吾非別
矣竟此問
史皇玉十之二而七點以石上之與土而毛名之等
トス此立研以悲王便玉人理其璞而
大作之

一雄して之を失ふ事勢と不^{可用}と云ふ事あり
一和^平への道用詩より
とく處の侘^寂とも詠^{うた}ともせりとも毛^も
始^{はじ}を書^かひとくハモリ^{モリ}とあらへ
ソム本^{もと}とのづけ遙^{とほ}と世^よと家^{いえ}の世^よと孔^{くに}
穎^{さき}達^{たつ}言^{こと}の西^に秋^{あき}とのづけし
此^こが吾^{われ}と別^{わかれ}せ

里をまよふ事、ぬふありやうりて、猶猶もれぢ
書と木の印ひつらうて、あどりもすつあく
ふ。今あら處へが書の碟十用くるやも
手取る本末のむくゆきゆき。

一ぬふのゆくとくとくももゆく詩あせ
とありサトとくあとよまと通う時十心とく
毛八十よぬわづまくはきうじとまとの一もり
志とがすり寄り毛を西風よ松どうとく中、
動く情成櫻梅桃梨もふと灰志とくかよあく
初と芝蘭黄菊よからう處とら翁八二碟と度て
圓承とくとくと東風承志のむとくせつとくふ
わうまよ詠く六氣十時毛りし海よれしの
璞よつりてもし。とくうふかの卯思也津朴船
とすすとつううりく毛えきうつとくうみせ
一詠乎。一毫嘆するもも詩云毫集もあう不宣謳乎
一詠乎。するふ不宣手舞足の毛か鷗所とく
此詞と毛毛と毛毛とくらべて、毛と毛と毛と
くらべて、毛と毛とくらべて、毛と毛と毛と
くらべて、毛と毛とくらべて、毛と毛と毛と
すと毛と毛とくらべて、毛と毛と毛と
小立之間身軒と毛却て毛と毛と毛と
ふと不宣軒毛教哥の格も毛と毛と毛と
毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と

一其上孝のあやまつ

の篇よ其を盛文アラシに成せば

松玉云柯頽也
式也昌皇也至也

在すとのあやとすと書ひてゐるのによく吟味す
て、別にうそともあやとさう同率うるもあらえ、
唐紙すと地のこゝなうとすと書ひてありとども
奥うるうふうううと書ひてありと書ひてありとども
奥
此紙へ向ハ格玉よと文と鐵く與と催さん
とあり奇としと白くとしとつるよゆるを
引くまくはゆうあり

一天地と初一鬼神と感せしより文華とあらぬ
情と報へとえうりもむ動天地感鬼神と詩の
序の詞や鬼神とた万能の鬼神や詩とつう
とく詠吟すの時ち心もあらずくらうが義也
鬼神と感するとはもれん人理や奇とよくなぬ
やふ。初出多く綠とく鬼神とよくなぬとゆう
ぬふりまくとあるやとりよしと極ふよし
一偏を信無とよし。偏をとほ世間のうきと相應信
懸ハ公の下さきりまくとよ無事よごんと今之
とも宿らむと報とうせりとぞれとせふのう
あ葉はなほすと奇とよしと信を信無へとされ
ゆく。まくあ葉は人丸身小さしく秋のさ
く風吹きすうちのまよみくわいを信
を信無とのうづのうめうとえふオの奇と
まくあうよの方まへお葉はあらむのうすく
女人不入の地とひづへとて、いれまく高麗と

一
魯人也亂世のまゝも元氣は舊色、安んじて
乱世ノもハ悉く心懃仰る事ナシ也。世の如きが
内にせらる風毛より、才人すら其風毛にて
時々無事、もは乱世ノも何の心事か。方外の事
事外の事、也、乱世ノも何の心事か。

一日よりは童謡高書も收めし日也の事
よなむうちあつてゐゆの事と書高書一これと
立画と云ひきりともとれる八画の事と云ふ
すもひゆも青れぬ竹傳うとくは通御う
一章一宣の絶へおまへ重便へ御うりあすと事
人せうつてうかく和青れきをぢづね
よちよぬせりあらも神のえきを神急和えれすと
とも鳥よぬうきく事あり余のよび

今ハ奇才くハ節物感にて墨人節也花月
奇才くは其政の事かす
とあ（一）すとあり歩心と云ふ之を體え
をよしと云ふと云ふ
一古の聖人沖の人の質愚と云ふ見
直代よ事も多ト云れと云ふ其
質愚の運用と傳へんせぬと

とあるをかへじつとももみ海世の姿をぬ下
ゆよ下れ親よ最正雅へ故とくとゆふ見る

ふ

一二唱三集乞ハ漢ちよまよ家扇より作文と
立日声としくくよ、内すむふうと探て感一きせ
しらふりまかやうりよ嘆すさまり、此ふとけ
て一音唱くニテおなじりしとソノナリモもむ扇
ノ奈乳泣きは世のあうつて和ぬまとニテひ
かしりとくすまくはがいとせり

一平あれ義勢是不可心始ノ間の既又よめうか
うとくとくひづる奇やせあ奈ハゆそくをねそ
とゆう御の端ノ缺ウ言毛ノリ始

一奇ハサムノ成見うねゆものよもくしひをろかハ
美ナリすうすう春雪る粉花中秋蝉少樹とこ
とくとく奇うんとせ羽より吹トノミハ落夷うりニ
ヤシノもえねすによあすとゆうすくハ幼向弓
ノ牒と取うり他とふより舞ノ身ノ事とぞくニ
れしゆふや

一大輪ハ推輪の雙よあともハシハ推柄のううろ
とみく車ハ推柄と造り軸とシテ輪とあく
乃く推柄とあらうんとあらはざれ推輪など
しもよ車ノテ千里ハ路とせりとくすと
義十射もりと海世の声と却てすすく所皆ゆさ
すすく車のとくれ推柄よ立ゆくとゆゑま

御見色見毛毛

三三
傳朴ノ軒とシテモアリ

ああ条の御向莫大する成此佛言ヨリ
て大輶椎輪ノ奇シキを引セラムサ神要ハ
音や重く之御辺足とソリ佛法ももと
恩院一より道のねよりアヒリカトヨ演成式
并弦始式何も哥ル制法とおせらもヤ

一難ノ公を正飯よシテ也モハ弦始の如キシキ
ある所には哥の西海うゝも理と付テアリモ
ハ毛詩の西山ハ笑うゝも理と付テアリモ
とニキシキくも理と方差よりアヒリサ西海
とニキシキの理と西山モアリモハアリモ
難の如理とひ西山風ひきまはアヒリモ
アヒリとソナリものあり

一漢魏盛唐是ハ漢ノ母と魏の母と唐の
世盛唐中唐晚唐とくぬ凡流アヒリ中よ
ヒ盛唐とアヒリの子とすりえ和物後も羽流ノ
シテ盛唐とアヒリ高宗を億年中アヒリまほの
天宝ノアヒリアヒリとアヒリの姿アヒリ
一万葉三代其以後阿ヒリ機集其アヒリハ時の舞姿
アヒリアヒリ始姫アヒリ一代アヒリ賞姿アヒリ
アヒリ体又まれよアヒリ

一模寫操何アヒリねとうとキ寫業アヒリ
アヒリ

一漢朝ハ歌アヒリアヒリも漢土ナ代ヒ他の種姓ア

あくまととを改めとありしもとよもあき
えよへりてゆきゆきと化ありて天
下とねゆゆ向ぬにすこもよまするや

一吾圓^同ハ三井地神ハ御末圓の曾統とて先の
みづはまとすあよ平ハ新意大よまする事
なきや首圓常立尊あ御代よりまく御一
種姓^同御座キニモよゆく内臣のひはり
ゆれども大よ變する事ハリ汝の曾統とて先
のゑすりがとつゆうううう統とてとも
しゆゆゆゆゆ

一末圓^同ハ所好毛ハ御代毛ゆよの様^トき
ふとんちゆゆゆ

一吾圓^同殊^サ後成^ハ作^セあ葉^ハり葉^アあゆ^モ
まく代^ク内体^ト決算^ヨのせ^ムいづも^ル也但充安
ノ金^モと後成^の化^モすとツ^トハ所假^シ湯^トて
うかうかあり^リあゆ^ハ良^シつと^スすかの体
や^ハ今^ハよ^ムつり

一紀氏貢^ムとま観^{アフ}み^ム氏^ハと^ム聖扇^ハ
と^ム聖^モと^ヤう^ト一^ハ紀氏^の貢^ムと^ムと^ム
多^シ小^重新^機と^ツま^目録^モり^トと^ム
多^シ新^機と^ツのう^ト金^モと^ムと^ム六^人八
奇^仙の^キ九^九九^九もと^ムの^ム奇^ホと^ム
九^九九^九十^五もと^ム山^田融^院の^モ
渉^モ合^ハの^モ後^モ和^モと^ム氣^モの^ム奇^モ

大枝拂入去有之方哥之系松定多中油墨鉛
金金右相府上伯士之父之子之秀哥清肺
頭肺經信依賴基底舊成六人哥也机升
欲進亦可乞八一白士古序之刀毛之刀進
海國行院之秀哥大射乞八詠并大概刀與

卷之三

一西風蕭瑟深秋十月
北人之鄉也

一幼志の人に成るゝて其事より前より有あると
即陸土衡の文賦の序と恒よ患意
不称物文不逮意蓋非知之難能く難ト文是則心
と謂ひ無前而愧恥あり但空也其の由愧心す

詠すと云ひ
詩と志の所之よりね
心と前とせよとゆふ處を詠と於け
御音
鐘年
宝象の玉羽乃れ
秀逸とととあらう
取下とゆは初とやと
ノ字也
のあは申初浪う
まきまく
み生國と極めゆ
哥仙ノトカシ

一百道と申す聖教も、勢細至の曉。此心事すよ。海り
て、立がゆり千里の也。りも一歩より如きまつを
まつともくとくをゆくわひのね。りかくすとくとくまつ

しや只不思量事。母殺害のことを汝に誓言
せまくはんじゆふともあらずかふな、いもんし
一哥ハ久くし称とすとこすゆ次より未練の人など
モモハ百練鏡ノ奇也唐の昌黎公八月の日
正午のよへかと清うつくまのく百度碑て
鍊つてもと不練と未鍊とヒ練のまぢ
金片うりが金片う用來きり鍊鍊と爲ふと
みゆきり

一天名よ闇證禪師 文宗は師文義とすす裡不覓
教外別傳の情を得るや是非宗旨又文宗は既
とえぬんじゆうじゆうをいたすむりとも宗
もとせりと教觀不二のふなりわや恵心鄉校は
金通達ハ第は既不知後世、名為愚者、虽不知一文
一句知後世名為智者とあり多よ之後世成らうとハ
アレウリハセビ又お觀かニのむへお通すう格
すくも佛果と來きせんたりん轉の配立うりま
対はあ親不二と立候て

一長音此声常の讀治には古音とづくらひこれ
声句と純するあやもまく一流の声のつひ松
才立ぬや

一拾遺 声糸ゆ下よ古音れど文とのまをハ地音
モハ文の哥とまくもし（もと）とけり此義、
す教寄ハノよ文と在りよ案（てしめ）とゆ
ハ向よ文とぞくゆ（一哥ハ只ゆと況ゆ）

よりおどしてまゆの文の音ありとつま
但定めずまえの文の音はと秀逸もて成る
そとえゆうとては食痛の御とてくと
せやまやとてやまととてやまととて
と可けまよのとては日をう間持あると文
一時の音せ養毛地と文との音に相似り但重
日教あましに沉ふ一あ種いそづくしはるま
とさすりともちもるやもばくもむらかよ地
とえとれ姿わらとやまれがの時ノキとほせん
たる秀音の大体ノ音や又緋音れ大統の東
ハモシテ

一入道医師御の象冷泉大納立當時の良文と秀音
ゆも心細とみくらうもと地と文と本無と案せ
水うかうかう地極よおきりうきゆくうりの良
音始する冷泉よ音せ
と音よ二条よ二条よとくせ
一未奇と取するも集於摸骨の姿あり奇と
は佛オヨハ離婆多の度野とゆく日下ね
小ちうの堂より三脚の後ノよ病と及ぼす
二ノ鬼人と稱くまほは二鬼多成我食とあり
人取つる鬼の云々詮此後ノよ佛オヨハ離婆多
才食とくしにす離婆多判りて至無假假
人取つる鬼の云々詮此後ノよ佛オヨハ離婆多

は鬼の之糞へ以て食とすも正しゆと才食と
アリハ一あめういうと心きわめて食と時よ猶
ろ鬼との人とはまくもかくばいじきわめて離聲
多よテ一食とめど無れど是肩より多くてのさ
わづか患くともりノテるをちんじと相つゝと生
身の離聲多うり又食するをひ鬼体と生身
里にてと食と毛則棄胎換骨ノ事より
宣教小の奇形様ノ神也ナリトニ事事より此
次云離聲多大と左假和合と麌と才所以
とシハ夢語也 罪業と魂果す小地獄ノ銅
燃猛烈火ノ中よへくと各の禍も石燒息あり乍
鬼体を食すリ財も元羅漢神也わ

一伎野の海よやく
直ひよし

一月葉の青すとさかは性も開白ちよく却る月
ひづりすしとゆと多くひくも方言す
まほや地祇のあらわする事も見えまほ
うとゆとは用ひてんやこふ月ひづり
ももとまほすりもひすつめちひをしもよ
くとくすくまほた万葉の事もすくひづり
やうむすとゆす事は墨花のとくとく
まほ地祇の神といづくとくはねがむまほ
えとくとく神のあとすとえ神道の祖所也
えとえとく神と五神の事く用ゆ根むぢり
おまくとく神とい祇の字と見ゆるみとふとの
觀山の用ゆりたり涅槃經云一切衆生悉有佛
性如來常住無有變易と云う浪声流よよきあはれ
ととく岐上土濃とちと大富權現の逆と書ひてま
まやか
彷彿や志賀と云
せ万葉九
とる安那

性如来常住無有度易とソラ浪声流よ止まひ處
とヒハ吸止土濃ともアヒト大氣權現の迹と書候
ミヤ格 彷彿志賀とソラ
一またやくもあけく此万葉歌とる安鄉丸
ノリムリふ面紙よととよりんと移歎歎取様詞
めりとうすとひりめくせうとひりとひりうと
とゆき御茶余れ連せりとひりめくせがうと
取青とくはくあよわきまほすみくらみ
よみえくはくあよわきまほすみくらみ
すりもかのをすとようと羽
たとくはくすみほせらむとあすく義
たとくはくすみほせらむとあすく義
とてくをめくはくすみほせらむとあすく義

ちのひまかや糸をくじて織るもあらずや
とある所より糸をひきて織るもあらず
松も木にうねゆる糸と稱す數首の歌ふらんと
もれを貰ひるうつて万葉より有れ極度と
てかくこゝよいりうちぬともうもと取く
古今ノ月歌すとさうと丁度あくとこそすに
うりますとわんへふとあ葉と人毛津歌
くまやう歌すとさうと人とくとく
よもとるを説く春曾と人とくとく
するやどんを傳説すむしへのまめやくはの
哥と集脇換骨ともとのを一寫前へ

花つまむり波面歌のこの糸公の根源とすら称え
素性の糸よと織りむちりあへまうりあまハ
今よしむらアムハビ糸縫もともひり糸根が縫
子芥のうりとらく万葉の縫とすらうつまう今
ノ名糸とすらく糸縫もよ工まへゆるハ糸三昧耶形
碑ふやく有るよ糸糸ハ只も雪す向くよとけ
乞ふ寧避すわうりとよ

一主有詞と傳事此問ますやあり出はよ及多
わゆる傳うとあらかじり但一主の詞とその
人の名字詞や其制の詞とせらうありても
ふ詞稱すとて略りくとありおせう
あるといふるものあるとキモテ糸糸糸糸

四つもよめりしきもくもくもあらへくせうふと
もへて直すとひよるは序部が曲流といふが
欲を附へ出の言葉のものもあつてあやぬと云ふ
転合とづくらへて欲

一章よ一のまくでき羽を衣せりくまく

一永裕ようして裕すみかく瑞ちきうらや

一佛けの戒と云ふとある。もばづれ禍あまとも
しれずと見すとよしと喻よしと亦、秋ノ夜
泥末利唯酒唯戒と文出いへ旅院太刀丸の最妻未
利夫人也戒とねく不飲酒、不取室黒りつ時
二ノ色ト罪もある。才討符と婦人もとか
なむる太刀丸は主人の唯酒と破事く盡取

地獄長名あはれ見スアミカゲリ見テ

とよしにゆくは白トと見ど一と也主人の事には
たゞく而初重とよしにゆく事をもちよ味を
含く此色トと覗省せんほと下一人とく教万人
へ辭れすとゆくもとくね戒よすくわく歎
成といづりふくろすかひ花可寫かゆく在安の
ふ家ハ仁義礼智信也。佛けと即教生偷盜邪
淫妄語飲酒也。但至衆人へあまよまくわく物
をもとと佛の不教生をもとのふ事ハ仁義も
無事はく極く万物の豪傑と歎く。又戒と云
事と津第はね對すとあくとも佛は五戒ハ
百と辟身とゆすとこどもまも一對にて

念不參教生心

一法曹律より輕重と立此法曹ハ主の法相入者非
律義の位と云つて時の名也戒律入内も其處に
生成也ノ穿之車と云ふ也然うも猶の
事ハ佛重めのよきを先も申す事
又ひう

一入通民都鄉
乃安樂

一本説とちかく事

一枝名の草の原毛、かわら井端、馬と傳へむ
あけひせとす、船中（かと袖）の見る
伏よ興（そよき）て都（みやこ）の（原）毛、
舟の中、將（まさ）る、紅と青の、枝
名の草の原毛、かわら井端、馬と傳へむ
あけひせとす、船中（かと袖）の見る

一源氏寄よりの羽と取源氏物語の書意事つて
羽毛八妙色也又毒もつ中からゆる寄ハ羽毛
てすく合ひる寄すれハ唯一部の羽毛寄す安
すきはより寄ハ羽よりとあきらめをよびく
羽中すとんとけよ取あく下せよと仕事わぬ
家平一生沉吟ノ寄よ羽をまくび（ゆり）う
味甚すゆ此ゆうとく羽とえゆす

御馬よりとて
引くとんちて
其の成取
東北中
ゆき織ひ
と飼ふ墨
魚紙のじみ
おうとう都
の山八月かく
て此のうる

鹽鐵字塗未結曉鐘急
月落鷺忘晨月無人是
大將軍之子也

ハナリと御せり 海をうちてどりあひ
とやうく御姓とうるや房より傍く御とほく
御のくみ本端のゆきもしく御馬とくら宣
引くともりゆくくわゆまは月奈え
のまは月奈の僅よかに海のふるをひ
くや但せぬありあ（せりし）時部の山月
かくくとまわると今が哥ハ系より和をく
けまの西方羈旅のゆき等よあふと引く
地くらむりかに引くてもり

一矢哥と取はぬ海河流のゆきとく
一矢般海拾きたともば万葉とて一弓
東今より海拾きとくのと取へず波海川のゆき
とく

首の作を中と石通の哥より取る是何を方
き仙志のゆき（後百首三
中の哥へす仙志とくもあすみよとも也
次云傳奇よはすかの作をともとのゆき
とく

一末練の人哥とてつねも案してもし（き）
一哥とて二の様にてよもちくの傳姓とく
然め哥ととよもじとく（ハニ麻よへとく）
食面氣のすゆりよよもじとく傳姓十本のさ
ひやうの様（く）ねるよよもじとく（く）
そん（ハ）殊（め）ある（たま）美（め）好（い）（く）
とあつ三昧よへとくとくとく（く）

不生の觀解より仰すりまうと/orいれむと
まきしとてへき皆立田と來たし一月當とま
そもはうと/彼見れ里山東立すふ是教無人
寺行り多ハ寺のまひたりと廻りくゆ経
よりうじむ忙めとて虚空のまくまね寄の
よりへ事よ多々退居すりやスね寄のう
思くは三昧の魔佛へくがむだれもよ佛性
とりもし寺えびすのくとらひくをおひや
寺の神仏衆立一おもとからせ位よあとと
独よすらくとちのまと不争えお佛寺の
久成せ一わのわるとすらも

一和衆式アラ遙よくせひくと肩毛、容易く、ま

一高寺うかがひ平生の三昧へづらきのひもとて
妙位坐卧の間名寺めお来すりますありかみのう
ハ故東立一とよみうとうりもすれづつまわり
もハ即作よ不争があらうかり

一寺の風船ハ人のうみきりきり

一利よ愚念よそしり元財ともハ古今の間が平を義
不とくぬよと雖もと卑下へ御言や

一花も黄も赤も青も色も白も翁僧信を信慈の安也
ウラもよどりぬ高きもくまくまうるを矣

むとら立ク翁布キモヤ

一片ヨシ月の八重れんわよまきまくとくと月の
こくまくはあてものうめうめうりけうものとひく

こぞり

一重之奇ようりをじもとそりとあくびゆる
うづづづづづ月銀せ年こまか月のうよにわと
すみ葉のちようるさやへ秀年すすう所と

參く參く參くおふれり卒混乱
一奇よなひのくらはゆくとし
一地み半凍地みとソふれのまく、かまうがの
うりくわ

一腰綱裏縫魚

うじよやうらわく、れきくまくく
百半りねり、まうねせんとくは年八首或男八
女とせりひづり、よ百半まく車の幅よ妙て
え養と百半よぬは、なわづとひ、良男九
十九半まく車のく百半よもろく車具男八觀死
て不來三内、のくわもく車と一様うくもろ
半ようりきれ桶のく、紀百半よとえうもよ
主ふそくすく次略へくるひき百羽よとせ奇と
作志同かうり二様よううと引のぬゑの様よ
あづみの百羽捨とソモモ船のぬとしきく稚うも
主と百半いすにうりてうり桶端様とる

うや

一等思あ人あよ津國の生あけゝもの在ひ是れ浪
とやせひひもく、此年の心ひあわう人の人情と
窮也するひづくの男ちわのますわく
二人の男と寧よぬ本とあふれかとわ爲とさる

は高川のをば射りてうらもと舞よと立と
ノ則はると射よあ人あ一もよくりまつるの
女もの川よ身と殺ゆり二人の男よきうちくを
ねせり後と取くよりはまはひのトヨシ
ハ居とあゑひきとの事とまく足ふをゆく
大将よ号部々の事とれどもゆききりもば
活かれ心きへくノリゆきうといはとわうあり
玄井彦とあ葉れまも言ひますくろ
いくえとよちぬのますくも以のきの男よひ
くことうすの條れ事かの難ひへてハシレも
名寄すう

一結題作引の事

せきよくも地寄とあられゆふ

釋するふえども起下する本なりとふす地
橋と身しもくれ川川く野魚よくわく
あくわんたたすすむすの金金くとふす
小公おくるを但切切くよせれりよ併併くろ壁
人人の手手ともとくくを立立くよもくをき
みあくわよ事くれはまくよもくよあれまく根
高木木うだりすくとくとくとくとくとく
唯花一束束のうよ縞め縞くらく秀秀よお通せり通せ
ひくうくもくも利しゆくもく
一弘弘く文多成成あはきくもし事事一高高くよ後後一
たくわく

一西日の馬場ノ又月写年五月由ようりあくと
おもとあとめやの根をめと
一石近馬場とよしーをも東今よひよりれどとて置
た近のあ馬場とくふ月を自首よ競馬のうす
今ノ小野布近ノ馬場の所やもハ首ハ太め事ハ時
の馬車とるとはあそくしとふと自とてく
しどとあるの馬このはまほりとて馬車とて
やその車まへうけりわく馬よとくしと
えとひとりの日とんを古今馬場や車を繪車
すとうへ絵ニシカキ間へうすとて自とてく
もしり古賀ふり生より月よ花ととむか
だかがく自縛と不奔る萩とくのう

えいがさくとくにく無なく車ふとくちう毛哥の
風ふうわくらうもくへーりきなゆー

一詩破題頃年黒文開庭霜
そゆと仙人成観操とせり用の歌と極端
必紅葉ト云玉とソヘ高寒宮とづくまうと奇ハ歌ハ多と除
ももとと御歌やりが詩年合の時平方よりゆ
人ノ耳とある後と見ゆ人と年とゆれ
様よす作

一花山よ漆乳色とすれ色みどりふすくや
のそじうくようくまつめ年ハ乳色とく
字もり人妻ゆゑ余のよハ一向よのそふら
きよ傳く太平の山とか難解那の年也

詠く心とソノ先帝の想駄ハ主ひの花ノ妖艶
すり姿美女よたゞへりゆすれ文サルヒコリハ
山を誰家碧樹鳴鶯啼羅幕高まき處花堂夢
覓珠庵小巻せぬへるま花の豊しきハ
孤すり樹夙奈すもよまゝ乗れるも既に催し
仰ふ羅幕うそ御くうりゆくうりゆくうり
青よハ花堂より壁の御うりとえくらは珠庵
とも不卷仰わ名情ゆうりとせせくはくはく今
ハ平ハ翠すり着もひ花まづくらうりわく
鶴鳴於珠の庵とまたよくゆまく花もあわよ
まも一すくすと楊まき花まきのうとく
夕すくやめ即花奴とく花ひやとく夕
峰うとくすと珠庵と卷あく時山もゆよみ
すくあり多よれ是ちく
一ね葉の添西うりとくはく海もあとくうちく神れよ
すくれひひくびじくらりやくく審と人あくとひそ
うちと渴くつづくかくありあゆの色白極すす
自余是まくすと萬物知世界の心事はねむるよ
秋ハ愁ひすとがまほ然人よあくねともゆどす
波れえとじあくひがく秋ひと林の理よじ
えきうつ袖とりもく秋ひとれがくく
袖そそしと秋のとれにこくのれいれの袖の
一直綿お葉うらうひるの花の部まくめの袖の

多そ一ノうるみ事多モニシムれ事アリテ
ウト多メ清和東觀の御文庫ノ多キヨ
多集へつゝり機シト佐シテ
シ勅書シテ云れ事多時事ナリトテ
多サハ多ナシシテ小ヒキハシタムテ
多モ多ナシ多良ニシテ平あ城(清連)知
ハリシテ
都と西の事多候事立候、ちんハ今之老事
之部小今ハ平安城と立候、ちんハ今之老事
シ對して有シ故ハ有シ事成サリヒモテ
只候事よシル多モラシシトシテ
只候事

ノ是立所詩云蘭有花映錦帳下庐山雨夜草
庵中此のノウシトモアリ蘭有の錦帳ノ花
盛れりけと今之部よシテ庐山ノ西半を
系魏と有シ多良れ部ノ主様よシテ
ウチハ平ノ事よシモと首置シ
セシの花錦の花よシナリシキ林のし
シシシシシシシシシシシシシ

一山家東家多シ人ナシ多キ多松せり
ト多シトソシトソシトソシトソシトソシ
ナシトシトシトシトシトシトシトシト
山里ハ草木多シ多内アリケリモ多
却うシトモアリヤ故ハ多モシナリ

といふとそりとまわりふくやと車と同様ふく
ふくりうと一あじてくまほのふくそとよひり
やうれらむちふがりとくろや

一けゑあ葉ぞれれくふくいわと筆の筆川す
ゆう山娘の神せす立田娘ハ林の一まつづくし
まふと山ひのふ取くすり是田川よううくあ
ゑがきや山娘ひだりはあゑばうもかう婆え
も改秋く日うそりそみとみつ今冬の
川よくあゑばうく山娘のねめくわ恨
てまくまよくはの延ふくとくとく免
継つとくすのね山娘根源ありせすの作
立キふやあと持とせうくいふくさの君
よりふりかう立大将治舟船の秀成を海ようと見
ゆうとすうとまかのよやくはる小審要せ
うかまくまく海よ立入行はゆくは
ともうとまのねまくよみせひうふはう
えうき取うけゆくはとすくうりひ西紙と
墨川のあゑよくはとけふかとひひうう
てあゑふくみづけはくゆうとまうくみと
くふくねのくちのせよとくらよふも首支婦わ
ふもんの奥列下り主妻ふくわりよくは彼のの
ねひとはくふく事わくゆりふくとまく
はくふくは主飽方よぬくがうる時主飯豆

もとまく未だねひ候みすよゆぢく平くせ
あらう山うまむちうこのはうゆう様よすゆじ
とゆうじうてうふくかと候うきりまん
くまううすめり一月れとくじのうくまく段
わく今れ作ふともしにきう定まねひと與
人へまくそくはす神マヤトク月ふ

一月の百首記ノ百首

一、道長郡卿る夢。二、月ナヌ承續寺モ百首
三、月ル歌。四、月の頃モリうまむせ。五月
前夜月うまむ入へりぬとももし時雨ハ秋の
季。五、春夜そのを候噪あ。六、月アキ
大奇の如新他季。七、うづくふり候也。八、月ノ
百首ノ時處の三月八解。九、せり三ヶ月もり候
て上弦月と譯よ候。十、五月不知。十一月十六
日立候月ナラ。十二月ナラ。伏候月ナラ。ト
経月。下、上弦月。上、上弦月。下、下弦月。日
但下弦月。ト。シ時只トの事。ハ持て上弦月。月
の始よし。シ。御よゆくよ朝日。ハ。月。ト。ゆく。ト。或
義。シ。く。ト。向。ハ。ル。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
え。ハ。る。日。え。集。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
日。え。の。集。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。
ト。ト。月。ト。追。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。ト。

形のみの夕月車とぬりて相あつる事
すつてこそ夕月車といふものと弦月よ
りうらまや月へ鉛城と俱食よければすつま
親喜薩ノ所造すまに於勧樹井の不老の喜毛
夕月には喜薩ノ千部の場中よすと半一の場
やこの場ハ實ある所造へる沙波をは重
沙よ併勢ね清よナラル月とくづくひ起る
う上弦より下りまくるのるノ月、自然物ハ文
経よ併くもぐくふ者今棄とくともや

一傍題とてソシテ可堪そや

一傍題とて事もハ月ノ事よれども人氣あれ事よ
麻とて事とす事共の細りゆきりゆ

産の事ノ事ハ歸るあつ事の事と與よする
う事事の傍題とて事よれども人氣あれ事よ
新の傍題とて事と用怪ノ事とありせ事よ
せかよふふふふ

一弦月とて事ハ空虚のみ

一弦月とて事ハ空虚のみとも空虚のみを
あさくゆきてぬみより但住の事ハ人道よ
ハシカリスくきれたの事や、躰格の事は
万里れをもつて、人の事ハ時々きの面
れもつて、もし一蓬生とて三往ハシカリと
ゆりそあつ不省ハ空氣ものとの事世めと并
す往後圓とて月の往もつて三往とす

一難の壁とあきらめとよもやの事
一難の壁よ歩きぬく流年とおさり委不破道風

一卷之末有此之私利
杜

かがすへば誰かたまのうりゆくへる
とあらうてがとうひんのゆめみまことうゆ
のまとあらゆよゆく、うきのかと教わる
えりやうやう

一
江
獨
步
自
題

ね御年も草野と興きに漁村
れのむらの山も自らまのすよ白山
寿九年も草野れ生の草野る日根九年
八月と秋の日根九年の春八月の草野
九年の秋と秋の日根九年の春八月の草野
九年の秋と秋の日根九年の春八月の草野
九年の秋と秋の日根九年の春八月の草野

よく文章とほくをすこしもせんく教き今と
そせかたりあつてよめくはまきまきにた
は通古實と不思がりすや理了氣陽等
のすま事轉變れき私としのうへぬ徳う
とも哥とわざりふきりりきくとれども
うりて氣も考へるもや只ほ西く
うくと詠すまに則悲海とさひの是處を
ノ哥みわざりふくすてまくけい體う
寒うりくけいきくふ風歌とくくと
會うすまれうよつりくと水を薦しとふ
と詠うくせう時えくじれむくと哥とす
はまうくがむせみよ三新の井よ事うゆひ
言九面よゆきなぐくく白すふえ
一は率經ノふかと。一は取くたとふ乞ハシ義
の中」雅の言よ相面研ハシとく
古今ノ序注半大雅
研ハシとく風歌くふきくく
りく源うくとくのうハシ義中ハ風歌
毛ハ語みと語りくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
和音や即風ノ所の姿ハみすとくとくとく
法華經疏蓮華音釋傳論
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
毛一りゆく壁前ふ三車火宅の前位解

ふよ繫珠の命不可勝計 え縁不平滿のは皆
非命者、難知次はけう取くへとキとソラアリ
枚もうぬへらやうすへテトシニ義外中の此の
字やおほづく月よりとて、鳥とて令ひ、ま
るとての手とて、御了經ノキムハベシと
とづつあよねす、雅の手

一品度生諸衆生 其數無量

海

もうぬねく柏ソヨミケツチヒウツナシ、
應化特尊世よあく一切衆生を海へ全を以て
や希ハだ、とテウツクウツク海マツツウツ
ナリミノモ極とシテ、アツメテ、ナフリム
六義中の奥ハシテ、アツメテ、セイテ、エス
海度すうは死のゆ某れ位をはき、ケルヒヨリ
一切衆生と海をあわする事、たゞ、圓の大き
くらべ、世界のぬきぬけり、うそくあり、アツメ
ヒキアツメキリあり、三あみのアツメヒキアツメ
薩引教のアツメヒキアツメキリ、多度
度生諸衆生とあく、序ふ述門のゆがき、う
きともあめのアツメヒキアツメキリ、サツメ
國融ノけ新十界より、うそく做度竹の缺、
こうかく、うそく、一切衆生の目、うそく、うそく、
教ノうそく、一切衆生の苦、うそく、思慮安
きく、あめの、うそく、うそく、うそく、うそく、
せん

よりうれしき事心にえけりきよはゆる
あくわい心へあとけりうめく一ゆれ旅人
ひりくされ移もよすすへせんけりうめく
とゆるまきべかうく人々とて旅へよそへ
くにゆとくくあくわくゆとくくゆ地
ゑ藩嬢のね飼鷹極火の中よまくあハ闇
魔王ナ化エハ鬼神ナ真官ナ化エ
死人を令按若リ身ハ無く病とくニ葉
但空の恩廢へお伏り地を一人おまえすもの
かうりうりエ引おのやううとくのま仕と化のほ
ううすく引よ喜藩へ十地とくつまよ一派
ノお化のもうううびううの重よくふも
六書體へはづめよとんが一筆りと産む活字
の文へ下すとあつ手ひれの序品の下す
八部ハ一部の大綱とすする十界を體を
喜藩へんくゆゆとくきすすむれゆくね
とくゆく

一通書の傳品 最後才辛巳一偈隨喜 玉川の源
ノあはくしよきくばんはちよくまけう書の
公卿へ連絡とすとくとくくふねくとく才辛
ありふまく者と経方ソレモトとく事あり
此碑文の下の数よと最後才五十軒ト初ふみ
處と文サ紙のひくま縁とすと來ス十数の者と
全不可有勝者とソラヤ多よ前と取くよ

寺仰り焉國より他國へ移ふわくはよ主教人
をくみゆゆの國の國もくくうものけりえをれ皆
とけつうてゆきのりりまみくよゆへソクの
國へりくうりそと同時にあくまうま一圓
ノ多良音改ヨモ國の國へゆき一圓八角
仰ヨリカナモ國のかよわと皆圓の
成敗のトヤミハシとふま端の佛國代西
殊亦も最後五十軒の多良音日法時や金寧
此後又く流のまとそしりケルハツバ
ラリケルトモアヒ寺の角よモハ禪
ノリセキアヤトウハは兎童ソニルハ偈の
ゆふうくちあるあらまのうれいとくも

をもと備てりとソ事行を詩を波下流得上
壽者五百家咸シホのぬれり
保ノ未と波全
まくハツハトアハヤのまとあとソニモヨモ
ラズモ色とまに御ヨリヒと法釋との
レルアリ

一 安樂行品 深入禪室 見十方佛

アラウ庵
トヨリく入をすてこすねえとモナム波深
入禪室見十方佛うる程もと妙まじとモナム
みづ経れまやせあまくハ途門ナキふなまく波入
浦ちふの時半の佛アリタマヤモナム波くは
キは義中ハ總果よたゞくまゆす十方と看が故
小ちうのナムナの十圓の在を等え妙まじモナ

果と文殊、千地亦作り、
の元よりは、一或とみ
此一感と断ずるや。畢竟妙
菩薩入重きうち時、作は
孫のうりとシテ、是の事
化生れたり。相即道、利物と社
がよ来喜提菩薩、妙法蓮華
多不才、既ノ道地無相承滅の如也。

一壁言奇品 其中更生 悉是吾子

尊應化か世壁瑜喻ふの事めにやま年來生と
シテハ三界八向の生死流轉の事無ひと云ふと
欲色三界界や物中ニ衆の滅智とも草
也化一經ふも三界三界安むり大鬼と絶す
まハ又止宿車庵とひとけり佛見及ニ衆至
觀也喜見故の事も之転海普門の七寶も只
あくまきと車庵の中也也て汝の大心
はニ衆の滅智と無能くと多色三界も只と
一切空情とあひ行修もはや平車ハ
色圓京鹿車ハ綠観衆北ニホトノモ未車
房とやすきすまに田ふ車ヤととけり牛車、
蓋蓬車也は大白牛車よ衆して是三
衆の車の事成ゆとすくらぬ人馬相やいづるん
史ノ死生とや魚のぬ泡也千年の死生ニヨ
トサリトトと絶然アリサリトヒキニ
ユ孤高独ガとソムクルカサギと報了ねう
恩顧シテ國よまこととせつとせん降シテ
とソラキナシテ

一奇合哥一叶葉向ふみゆりありシテ但対
後ち加院ノ御教入引おさへり乞ハ釋迦
無蓮室客多僧の奇勝ハ教とりそもれ
ふ一拶れりまくまく宣多御子林
吹りわ風よそそそ生れ事のあれ一そも
ゆうとせ手風流もりそくして公力ナキ

所もなに様よ巣處の御ゆくよりゆく家
御れ風骨すふくらやく小勅引の御ふうとや
あふもあ御の御とをいひ切(き)くふ家
の年よ^{ウツ}
秋もまふなりせ年ハ天蘿^来爽蘿と初林風
色かわつて身と風葉をさりて寒あり爽
蘿とすりてやるの毒とシソシテ^{シテ}うすに観
集よ清角^ノ音よ^タえすまはと角^ノ和^ハ津の
圓^ノ生のうりふれ^ノ月内と云葉^ノりと
きりむるこみと音^ノねともゆと^ノ因^ノゆふ
小室家^ノの音^ノの生^ノりむりへあとく
ゆきちうき而すまは西風^ノましふう^ノ立^ハ也
もやひく涼氣と實せんとさひよ湯^ノう
森^ノもくらむと秋風^ノく、^ノの日^ノより取
えちく向ぬ^ノとより^ノ心^ノ内^ノも^ノすと
故清國^ノ國^ノとくとくより^ノや^ハ都^ノ
ゆきと家^ノの音^ノ御^ノ風^ノの御^ノ狀^ノとのふと家
の高^ノ音^ノとまの音^ノ御^ノは毒^ノの爽^ノ葉^ノくわくわく
事^ハゆ徳^{ナリ}ふ聞^ハや^ハとさひよ高
を成^ハ聞^ハとえ立^ハふととめづらくそ^ハの
清國^ノ音^ノ風^ノとよきく^ハゆきと^ハ御^ハは
立^ハまむ^ハ御^ハはめどに立^ハま^ハの音^ノとゆ^ハ御^ハ
清國^ノ音^ノ風^ノとよきく^ハゆきと^ハ御^ハは

ニ食すべしと也次第はノ也始ハ平の心とぞ
モ仰ハシテ少く釋せりとくノお説ノ詞を
トテ平之へるあたれより詞とぞ
タリスとぞうハ平ハ詞よりもと卷中
まやはよもとくとた思惟する
一平の福とテラ事と來べきのと疫ノ纏を
シハ一ゆの病ハ沙也をりと演滅喜撰殊
懸式等があく平のと見様戒律よせり
ア内流あらり仰間ア医よひ次
おまくち承うるくなくわうとひとす
因病とテハ不自もとまく年之言へれなま
されどもハ因きの疫ナリと曰ひ病もつ
ヤヌク飲用は霧もくめせすとハ萬にけく
ノ味と白れ疾よきと同體者のもハ色霧ハ霧と
ソもハてよすのまやせまいつまも白れ霧ま
一ウモ空氣やつまく哥よあくとろと
姫よや吹よ平之の疫とハ幼み又空の妙
ふとやるひのうと因よと姫よ但こゝ
モハ制のじりよ河と汝もすう
トテすと事ありまゆりの事よ
タリヨ草參ハ病のうとれぬとねらのま
モヒ平之の病めふとも名うとすとよハ沙也
タヌミ暴後と後來と事よ哥勢とわくそ
トホヤ當時暴後の立木うるハ故をと

ととくひの手
すとゆの手
はれまく
あせりて
桶ちり本
てとせての手
とせりて
手すり風情たれ
手すり手
あらわと後室手

とありやうふうそよわきりまく
ゆゆ事也

すとまともと食とまつりすと中飽
の爲とづり但信の哥トハクとある月の
月日はれまくとてやれめや三キマムニ
すれどもはあやと云ひゆえよとて年をまう
きとてそよ年やむと一まわきりゆくとて
年のはれ批くわき、哥と取くわきば年
はとゆくへ今自取とづりの御文もハ
きとてや、このまなくとも一自御批と云
きあひてもやと云ふ事のみのうふが
とあまくとて事によくいとづらきの事

妙にひ細とくわど之はれど、久しく細りん
て細りよるゝとくやの事無の貴也
きく人ノ手を尋ねま事也
あして、言ひ方や、則徳場よ御子
引取むと、言ひ手を

一
月元と義相應の所
まことに而氣をもつて
と身とまづり時事も亦
の意地へまづり身をもつて
毛孫へ取すと才思も壽も、因縁も亦寿
うと況々やうとソラモシテ
ひきのうのうやうがうが

之をかうと云ふ事今とくに沈吟と儀難と
の如き極めて吟味せし時則名篇中ゆゑの事と
謂ひ可と爲ひて一ひ考へて此の事も思ふ

一其社檀のね海の事よ。此君何者のは某かと
聖處へ歸る。とて旅社乃は某先客
但も外の事うとぞ。あ社
より歸れ。他社とよし。主事あり。事やあ
乞ひまわる。

東方先生

一隱遁の如作事九處毛、御之母の歲も於齋矣
よ後事を
北半トシノ和年九月と斯

權せよ後も年を以てまく物と
そと則あせむよく其の國まと寫
一枳里続王の十夢天色の夢木傷の中天生小
は王十八夢とみゆ 中小真珠と起よ

とつる夢あり真珠摩尼とく佛也也嚴よ
飾きり珠や珠と一珠よりて人のめぐら
と馬金剛玉高塵高塵河非法

ノ修まぬ者まほほを開く傳書あと書をと
れすと夢る夢やまほ書によりく
け事奇らかすねの作事くら外内和
されゆ先發傳す事者御了真珠の夢と続
者ごく承るのみくひうやまほく小真珠

福流と續あり珠のたゞ口外もまとえ
仰亮者は下御波せりく裏祖の
作ありとも後世を解りてはなを承ると承す
事えどもと

一慚愧地ニ字慚ハ天もも愧ハ地もも
一真宗千人ノ首とすく真宗とくもハ爲せ
事えどもと

一中敷是ハ修りぬ道の筋や或褐よ中敷と
ハ麻縫ナリ處と云ふもあり
一屢かく京通世塵ハかくも世よ紅塵と
や世のふるふるふるハ塵と

一不覓の泉石入膏肓是ハわざの難によひ

一毫雪の勅事おとこ小ソシムク宣室仙作
一維摩スミモカす三色毛ハ維ナ一默
メモリ又珠スジハ多ナトモキモリト
ウツ鵠ウツニ於毛五卿ゴイチヨウニ黙セ
本モノノモノトモリト
一言イチモントモ王津室ウツジムト
ナリテモハ我恩エヌ見ミ義イト目
ナリテモナリ太廣タケイ室ムロトみ狗イヌ小覧

一轟太刀の事も八軒を八日
竹と香油の如き多大の財耗致太子
西行の重宝船と曰く 檜の羅密のひよ
之は無事に多珠と云ふ事と取て

一
枝先
施事
之春
三月
大早
之日
也
其
時
也

一懶懶二探得題照是八題注空勘今
の泊釋と作系松五つよしむらさきは一
おれよしも細字もよしむらさきは一
よしむらさきは一

白板もありまへ不西義も仰り御多御よそひ書
あはれのうふかわいひもとは即一けの一編と
ゆたの東角と仰る事ゆくやとおり
一匪曾達天總星ハあ時の源内後支嚴院の御
嚴院よ

一剎又伯夷大將軍 宝鑑流敵義詮の傳
一下俚之間弟もこの窮屈 年下の如也
一博局 廣博大才の事也 乞ハ然と之を博伊

歌
詞
詠
一似山狗續
下平
入
羣
衆
狗ハニわら
ぬふうき
めたり聚
羣宵ふ韵
角とほせ
狗の尾よ
貂の尾と
つまつま
ねりせよ
と踊よ
うくまゆ
り舞や
矣

一五湖釣翁是ハ花蟲ニ辛ニシテ以爲遁身退天
道シリソリとソシく會愁の處トモク後越日晴
とも立湖の扇舟よ棹シテ西風の吹き
ようすノ昇トハ御名也とセシルトキヤ

在此一冊者予壯年之時於老師以下亮秀
室乗は直徳也今藤原長衛教寄室切
く間下愚謙濱ノ筆書集令付屬之院曾
以不可被去情急シカ名也

明應五年十月二日 伏下亮惠 在判

為家鄉

為世鄉

頤向

經賢

亮尋

亮存

亮憲

亮惠

初藤坊

後号雪松院

号小部達大納言

能實 全春 仁全 仁尋 仁譽

京極三四男

大放ウツ無文

泰尋

秀竹

經賢

亮尋

亮孝

亮憲

亮惠 素國

正清水合云和三男

初ハ穀山做官者三丁兼携齐道爲鄉
為門中和哥ノ道ノ傳授也ニ廿四歳ノメ
登高野山号めり新拾遺集李部
麥貿ノ後は撰者爲明卿逝去元間
始奉詔爲和哥所ノ國固

ヨリテ其事ヲ評定ス也



